



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団 URAKAMI FOUNDATION

NEWS
December
2015

CONTENTS



- 理事長挨拶
- 30周年記念事業
- 学術研究助成事業
 - ・近年助成した研究からご紹介



- 食文化の振興・啓発および協賛活動
 - ・浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)
 - ・H27年度東日本大震災復興支援事業
 - ・カレーアクション事業を後援
 - ・フードピア金沢を支援
 - ・読売写真ニュースを学校に寄贈



- 広報活動
- 事務局より
 - ・お知らせ
 - ・編集後記

理事長挨拶

今年も11月になりました。今、こうして原稿を書いている窓から見える迎賓館前のユリノキは美しく黄葉しています。ここ四ッ谷に住んで40年になりますが、季節ごとに変わるユリノキの並木はそれぞれの美しさで、いつも感動と安らぎを与えてくれます。それにしても最近は迎賓館に滞在される国賓はとても少なくなったように思います。日本の国際力の低下、外交の不調が影響しているのでしょうか？

2015年は私ども財団の設立30年を迎える記念すべき年になります。財団のシンボルマーク“食”は良き人と書きます。私は生まれながら良き人に恵まれる運命ではないかと自負するくらい、いつもその時その時に最高の人との出会いがあり、お力をいただいてきました。

設立30周年の記念事業に思いをはせているとき、5月にパシフィコ横浜で第12回アジア栄養学会議が開催されることを知りました。このような大きな国際会議に参加するための旅費を工面しにくい優秀なアジアの若手研究者の存在を知り、浦上財団トラベルアワードを30周年記念事業として実施することにしました。40歳以下の研究者231名の応募を受け、12ヶ国20名の方に30万円ずつ贈呈

しました。ミャンマー、バングラデシュ、スリランカ、フィリピン、インド等々です。受賞された皆さまから「この会議に出席できたうえ、多くの先生方から学ぶ機会を得られたことで、私の研究に大いに役立ちました。」とのサンキューメールをいただきました。

私もこの会議に招かれて嬉しかったことは、これまでに浦上財団の研究助成を受けた先生方が大勢ご活躍され、会場のここかしこから「その節はありがとうございました。」とお声を掛けていただいたことでした。改めて私ども財団の選考委員の先生方のご慧眼に心より尊敬いたします。

こうして財団の30年の歩みを思うとき、財団の活動をしっかりサポートしていただくハウス食品グループ本社の健全な経営を心より感謝いたします。また私の財団運営にいつも的確な助言をいただく理事、監事、評議員の皆さま、選考委員の皆さま、労を惜しまず協力してくれるスタッフの皆さんのお蔭をもちまして本日を迎えています。何よりもいつも温かいお力を寄せてくださる皆様様に心より御礼申し上げます。

また、新たな十年に向かって歩みだした公益財団法人浦上食品・食文化振興財団を今後ともよろしくお願い申し上げます。



学術研究助成事業贈呈式で
挨拶する浦上節子理事長

主な活動紹介



30周年記念事業

浦上財団は、今年度設立30周年を迎えます。これを記念して、「浦上トラベルアワード」と「30周年記念研究助成」の2つの事業を行いました。

◎ 浦上トラベルアワード

今年5月14日から18日までパシフィコ横浜で第12回アジア栄養学会議（ACN2015）が開催されました。「みんなの健康長寿のための栄養と食糧」の副題が付けられ、シンポジウム、ワークショップ、口頭発表、ポスターセッションなど多彩な行事が行われるという総参加者約4000人、うち海外からの参加者約1200人におよんだ大規模な国際会議です。このACN2015に参加発表を希望している海外在住の40歳以下の若手研究者に横浜への渡航費や滞在費を支援する「浦上トラベルアワード」を30周年記念事業の1つとして実施しました。

231件の応募の中から優秀者20名に各30万円が目録が5月14日の開会式での表彰式で理事長よ

り一人一人に渡されました。集合写真撮影時には受賞者の皆さまから感謝の言葉をいただきました。この浦上トラベルアワードは受賞者のみならず、各国の学会関係者より大変なご好評を得ました。

受賞者の皆さまから頂いたメッセージの内、フィリピンの食と栄養研究所のMaria Julia Goloso-Gubatさん（集合写真で理事長の右斜め後ろの女性）のメッセージをご紹介します。「ACN2015のトラベルアワード受賞者に選ばれ光栄です。私の日本での経験は本当に素晴らしいものでした！ACN2015は食と栄養についてより学び他の大学の学生や研究者とネットワークを築き、古い、また新しい同僚・友人と会うことのできた素晴らしい機会でした。若い専門家や研究者にこのような機会を提供する浦上財団の試みは人類のための科学の発展に寄与する親切と高潔あふれる気高い行いです。フィリピンの栄養学者を代表して心より感謝します。」



◎ 30周年記念研究助成事業

浦上財団は設立当初より①食品加工技術、②食品と健康、③香辛料食品、④食嗜好、⑤食品の安全性、の5つの分野を研究する日本全国の国公立の大学・研究所等に対する学術研究助成事業を事業の柱としております。今年度は、例年の研究助成に加え、「30周年記念助成」として、同5分野を研究する研究者の中で、資金を渴望する研究室立上げ期の若手研究者を3年にわたって計500万円の助成をする

「研究室立上げ大賞」を同時に募集しました。これまでも、1件300万円という助成額はとくに研究室立上げ期の先生には研究室の設備を整えることができるの喜びの声を頂いておりましたが、それをさらに1歩すすめた記念助成を現在の研究者の状況をよく知るかつて助成を受けた先生方の助言を受けての実施となりました。

募集、選考、贈呈式は通常の学術研究助成と同時に行いました。



集合写真

学術研究助成事業

学術研究助成事業は財団設立以来の当財団の重要な活動のひとつです。今年度は30周年記念研究との同時募集となりました。研究テーマ1件当たり3百万円を限度とする通常の助成額は食に関する研究助成の中では高額にあたり、これは、設立当時の選考委員の助言で、少額を多くの人に配るよりも、まとまった額の助成の方が、研究がしっかりできるとのアドバイスを受けてのことです。

30周年記念研究と併せてホームページや研究機関へのはがき等で広く応募者を募り、6月1日から7月10日の申請期間に過去最高の272件（内88件が30周年記念助成への併願）の応募を受付けました。9月初旬、学識経験者で構成される選考委員会で厳正な審査を経て研究助成17名、30周年記念助成4名、計21名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月4日にホテルニューオータニにて行われました。浦上理事長の「浦上財団の研究助成は設立当初から地方・若手・女性研究者に重点を置く方針で対応してきました。今回も選考委員の先生方のアドバイスで一番支援が必要な研究室立上げ期の若手を応援する記念助成を設けさせていただきました。近頃女性の活用が言われておりますが、浦上財団は設立当初から女性研究者に協力させていただいています。」との挨拶に続き、伏木選考委員会議長より選考経過の説明と研究者の方々の激励がありました。

続いて各研究の代表者に理事長から目録が贈呈され、目録を手に各代表者が研究内容についてスピーチされました。立ち上げて間もない研究室は、機材があっても試薬や備品がないなどいろいろな足りない時期にこの助成をいただきとても感謝してい

ますと財団への感謝の気持ちと、研究を通じて社会に役立つ成果を出していきたいと熱い思いを話していました。

懇親会では打ち解けた雰囲気の中積極的な意見交換が行われました。30周年記念助成を受けた研究者の1人は9月にご出産したばかりで、控室でご主人に赤ちゃんの世話をさせていただきながらのご出席となりました。懇親会には赤ちゃんも少し参加し、その可愛らしさに出席の皆さまもいっそう和やかになりました。おかげさまでこの30年間の助成件数は350件、助成金総額は9億4千万円余りとなりました。

助成した研究の成果は、浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで22号まで発行されています。今年度も23号を発行いたします。今までの研究の一例を後ページに掲げました。ご一読ください。



理事長より贈呈書を受け取る研究者



選考経過を述べる伏木選考委員会議長



懇親会にて

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは学術的・専門的ですが、「食」は私たちの日常にも大きくかかわってきます。そこで今年3月発行した浦上財団研究報告書Vol.22に掲載された研究報告より2名の先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。

平成24(2012)年度助成

「食物アレルギーを検出する 新規ツールの開発とその可能性」

東京医科歯科大学免疫アレルギー学 吉川 宗一郎



我が国において、国民の3人に1人が花粉症やアトピーをはじめとするなんらかのアレルギーをもっているといわれております。そのアレルギーの一つである食物アレルギーは、食物を摂取した後、皮膚、粘膜、消化器、呼吸器に異常を来し、場合によっては命に関わる非常に危険な疾患です。しかし、食物アレルギーを引き起こす原因物質であるアレルギーは多種多様で各患者によって異なっているため、これを簡便に高感度で検出する手法はほとんどありませんでした。

そもそも食物アレルギーとは、体を守るはずの免疫細胞が、食物に含まれるアレルギーを体に悪い異物(病原体など)であると誤認し、これを攻撃してしまうことで発症する病気です。主にこれを引き起こす原因細胞が「肥満細胞」と呼ばれる免疫細胞で、食物に含まれるアレルギーを感知すると即座にヒスタミンのような炎症誘発物質を放出し、アレルギーを引き起こします。そこで我々は、肥満細胞が炎症誘発物質を放出している様子を目で見えるようにすることで、アレルギーを検出するツールを作製できないかと考えました。

私たちは、肥満細胞が持っている特殊な遺伝子と、緑色蛍光タンパク質の変異体(2008年にノーベル賞を受賞した、下村脩博士が発見したクラゲの遺伝子)を組み合わせた人工遺伝子を作製し、これを肥満細胞に遺伝子導入させました。その結果、肥満細胞がアレルギーを感知すると緑に光ることが分かり、アレルギーを検出するツールとして非常に有用であることが確認できました。さらに、この遺伝子を使って遺伝子改変マウスを作製し、世界で初めて、生体内でもその様子を観察することができました。

本研究で開発したツールを応用することで、食品や医療薬内のアレルギー検出が容易になり、さらにはアレルギー研究の進展にも大いに役立つことが期待されます。

平成25(2013)年度助成

「様々なタンパク質源摂取による 冬季うつ病の予防改善効果の解析」

九州大学大学院農学研究院 安尾 しのぶ



冬季うつ病は、冬になると気分が落ち込んで抑うつ状態となり、春になると自然寛解するという季節性の気分障害です。冬季うつ病になると、冬に食欲が増加するとともに、甘いものが欲しくなります。この原因として、脳で神経伝達を行なうセロトニンや、その材料となるトリプトファンが、冬に不足することが考えられます。甘いものを食べると、脳にトリプトファンが入りやすくなり、セロトニンの合成が増えて、うつ症状が一時的に改善すると考えられています。しかし、この反応は短時間で終わるため、うつ症状はすぐに戻ってしまいます。

脳にトリプトファンを持続的に増やす方法として、食事を通じて血液中のトリプトファンの割合を増やす方法が考えられます。そこで我々は、日照時間の短い飼育条件(短日条件)でうつ様状態となったマウスに、トリプトファンを様々な割合で含むタンパク質(カゼイン、大豆タンパク質、グルテン、 α -ラクトアルブミン)の飼料を与えて、うつ様行動や不安様行動の改善・予防効果を解析しました。

その結果、トリプトファンの割合が最も高い α -ラクトアルブミンを摂取したマウスでは、不安様行動の改善が見られました。さらに、短日条件で飼育する前に、マウスにグルテンや大豆タンパク質を摂取させておくと、短日条件となった後の不安様行動やうつ様行動の悪化を予防できることが分かりました。

これらの結果は、季節によって適切な栄養を摂取することが、冬季うつ病の改善や予防につながることを示唆します。多くの人が睡眠や体重の季節変化を経験するように、人には野生動物の名残ともいえる季節適応機構が残っています。野生動物が季節によって異なる栄養を摂取していることを考えれば、人にとっても、体の季節リズムに合わせて適切な栄養を摂取することが、健康維持につながる可能性が考えられます。



食文化の振興・啓発および協賛活動

■ 浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)

ラオスは東南アジアの後発発展途上国の一つです。貧しい家庭の子どもは毎日の食事が充分でないため授業中お腹がすいて授業内容についていけなくなったり、昼食に一度帰宅すると畑仕事や家事・弟妹の世話などで午後の授業は出席できなかったりします。また、野菜不足により栄養バランスを



とすることが難しいといわれています。

浦上財団は就学率向上や子供たちの学力・体格の向上、お母さん方の栄養知識の向上をめざし、公益財団法人 民際センターに委託して自立型学校給食モデル事業を平成24年度から小学校2校、中学校1校で始めています。

3年で資金の援助を卒業し自分たちでランチを実施していけるように、校庭の一角に畑を作ったり鶏を飼うなど教師と生徒が食材を育て、また村人もランチの調理や畑の管理を担うなど協力してプロジェクトにあたってきました。3年目が終了した今年、3校の内1校が来年からは支援金なしで自分たちで実施するまでになりました。残り2校はあと1年支援を延長し自立を目指します。今後も新たな学校に支援を始める予定です。

***** ※ 東日本大震災復興支援事業 ※ *****

東日本大震災から4年半が経ちますが、仮設住宅から復興住宅や自立再建した自宅へ移転したり、南相馬市の小高区と原町の一部は来年4月の避難指示解除を目指し現在宅地周りの除染や災害廃棄物の処理を進めていたり、その土地土地で復興フェーズもニーズも変わります。しかし、間もなく震災から5年になる状況で、東日本大震災関連の助成金が終了する基金や熱い思いで活動してきた現地団体の中には資金的問題で活動を終了するところも出てきています。

浦上財団は「継続は力なり」で微力ではありますがまだまだ復興支援事業を続けてまいります。今年度は10月一カ月間の申請期間に岩手県9件、宮城県20件、福島県4件の計33件の申請がありました。

12月の選考委員会で今年度の支援団体を決定し、来年1月には贈呈式を行う予定です。



3月 どん中おつちさん(25年度支援)の商品販売・商品共同開発施設の落成式で冷凍ショーケース支援の感謝状をいただく常務理事 森川 岩手県大槌町にて

～ 昨年支援した活動からご紹介 ～



「体験を通して学ぶ親子農業食育教室」

南相馬サイエンスラボ

代表 齋藤 実

南相馬市は震災によって大きな被害を受けました。当初目に見えない放射能への人々の不安は大変大きかったのですが除染が進み、食品や人体の測定環境が整備された現在では人々は徐々に震災前の生活を取り



2015年5月 バケツ稲への田植の様子。

戻しつつあります。しかし、小さなお子さんがいるご家庭や一部の市民の中には今も放射能への不安を抱えている方が少なからずいらっしゃるようです。

私たちは放射能のことを正しく理解し、きちんと除染すれば再び農業を始めることが出来るということを知ってもらいたいと考えていました。幸いにも平成26年度東日本大震災復興支援事業に採択され、そうした思いを毎月の「親子農業食育教室」において人々に伝えることが出来ていると感じています。田植えと稲刈り、餅つきやそば打ちや豆腐作り、畑の除染や野菜苗の定植と収穫した野菜を使った夏野菜カレー、毎回行う薪割り火おこし羽釜炊飯など、普段家庭では中々出来ないことを体験しながら楽しく学ぶ「親子農業食育教室」は南相馬市の確実な復興への歩みを後押しするものとなりつつあります。どうか今後も変わらぬ励ましをお願い致します。

食文化の振興・啓発および協賛活動

カレーアクション事業を後援

昨年に引き続き今年も農業王国で地産地消が容易な北海道と九州(4月札幌市、5月福岡市)における「カレーアクション」に後援しました。札幌会場では天使大学荒川義人教授による「カレーで推進! 北海道の食育」の講演が開かれ、九州ではゆるキャラによる九州各県特産の夏野菜の紹介とその夏野菜を使ったカレーの試食がありました。

札幌会場



荒川教授による講演

福岡会場



佐賀県農業協同組合とさがみかんみちゃんによる佐賀県産野菜の紹介

フードピア金沢を支援

独自の食文化と石川県の冬の日本海の海の幸・加賀野菜を紹介する食のイベント「フードピア金沢」は毎年2月に金沢市を中心に石川県下で開催され、今年は30回目でした。当財団は第1回(1985年)より支援しています。

北陸新幹線開通直前の開催だった今年は会期が新幹線開通後の3月15日まで延長され、新幹線開通PRキャラクターのひゃくまんさんのステッカーが貼られたお店でフードピアサービスを受けられる「フードピアおもてなし30店」など30年を迎えさらに進化しています。



フードピアおもてなし30店のパンフレット

読売写真ニュースを学校に寄贈

『「食」は「人」に「良」いこと、元気のもと』の標語をパネルに用い、「食育」に熱心に取り組んでいる小学校を軸に46の中学校、高校、図書館に教材資料として毎週写真ニュースを提供しています。

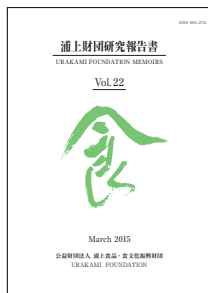
小学校等に寄贈しているパネルの一例



広報活動

研究報告書の発行

助成した研究のうち昨年度秋までに報告をいただいた16件を浦上財団研究報告書Vol.22にまとめ今年3月に発行し、全国の研究機関附属図書館や都道府県立図書館にお送りしました。また、今年の秋までに当財団に提出された研究報告を収めた研究報告書Vol.23を来年3月に発行する予定です。



財団HPのリニューアル・財団リーフレットの配布、財団ニュースの発行

浦上財団は昨年、株式会社心力舎様に依頼し、HP訪問者の利便性をさらに高める改良を施しました。今年度は、研究助成事業と震災復興支援の申請をオンライン申請にし、助成対象者との連絡を通常のメールでなくマイページでのやり取りに変更しました。これにより申請者の負担軽減や助成対象者との連絡が過去のやり取りもお互いが把握でき、利便性が高まりました。

また財団の事業活動や寄付金の募集活動などを紹介したリーフレットや写真を多く使って12月にその年の活動をまとめた財団ニュースを発行しております。



事務局より

お知らせ

浦上財団は公益財団法人ですので、ご寄付くださった皆様が減税を受けることができます。当財団からお送りする寄付領収書を添付して所得税の確定申告をなさってください。(2011年に設けられた税額控除には当財団へのご寄付は適用されません。)また、当財団は東京都条例により個人住民税の寄付金控除が受けられる団体として指定されております。都内にお住まいの方は住民税・都民税の寄付金控除のご記載もどうぞお忘れなく(*^_^)b

編集後記

記事にも書きましたように当財団は今年設立30周年を迎え、記念事業や来年3月に行われる祝賀会の準備や30周年記念誌発行の準備で大忙しの1年です。その30周年記念誌の取材で9月に復興支援事業の対象団体を訪れました。福島第一原発近くを走る国道6号は浪江町-富岡町間の約14kmは帰還困難区域を通るため許可を受けた車以外立ち入りが制限されていましたが、2014年9月15日より車での通行は規制解除になっていた(オートバイ、自転車、徒歩は不可、また駐停車、車外に出るのも不可)、私たちも利用しました。国道に面する全ての脇道への入口、国道沿いの全ての家屋の入口に進入禁止の柵が設置され、本当に「通り抜ける」ことだけが可能で、まだ割れたガラスを片付けることもできないままの店舗など、他の地域の4年前のままで時が止まっている光景に愕然としました。まだまだ支援のニーズはある、との思いを強くした取材旅行でした。(森川洋典・浦上佳江)



〈お問い合わせは下記まで〉



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

〒102-8560 東京都千代田区紀尾井町6-3 ハウス食品グループ本社ビル

電話: 050-3532-6365 FAX: 03-3264-6188

E-Mail: main@urakamizaidan.or.jp URL: http://www.urakamizaidan.or.jp